

# 遺跡の創造的活用と最大の古代都市

文——伊東孝

Takashi Itoh ● 日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授

写真——西山芳一

Hoichi Nishiyama

● 土木写真家

古代からの多くの遺跡と豊かな自然が織りなす明日香の景観は、「日本人の心のふるさと」といわれる。奈良へは中学の修学旅行以来、たびたび訪れているが、自分の専門分野との関係で注目し始めたのは、大学院生になってからである。町並みや歴史的景観の保存の原点である古都保存法の制定（昭和四十一年）は、わたしの心を大きく打つものがあつた。

今回、明日香村を訪ねてみると、遺跡の整備が格段に進んでいることに眼を見張つた。ここかしこに遺跡が見られるのである。

戦後の昭和二十九年、明日香村では戦争で中止されていた石舞台古墳の整備が再開されたが、遺跡の本格的な整備が開始されたのは、古都保存法の制定以後である。昭和四十一年には、国営飛鳥歴史公園の工事がおこなわれ、同四十七年には、「飛鳥ブーム」「考古学ブーム」に火をつけた高松塚古墳の壁画が発見され、また寺院



川原寺跡と弘福寺

川原寺は、飛鳥四大寺のひとつであったが、度重なる火災に遭って歴史の舞台から姿を消した。弘福寺は、川原寺の中金堂跡付近に建ち、礎石は、南大門・中門・廻廊などの旧位置がわかるように整備されている。

遺跡整備の模範となる川原寺の環境整備が文化庁によって実施された。この整備は、基壇の復元、礎石の露出展示、伽藍配置の復元などをおこない、発掘の成果を目に見える形で展示するものであつた。寺院の実際の大きさや形態こそわからないが、それらの展示物を見ることができ、寺院の規模や配置関係を想像することができ、遺跡を見るあらたな視点を提示した。

昭和四十九年からは明日香村が主体になって遺跡の整備が進められていく。遺跡の発掘整備が進められていく中で、大きな成果もあつた。昭和五十八年には、キトラ古墳の石室内の彩色壁画に玄武が発見され、世間や学会の関心を集めた。平成十三年には亀形石造物が発見されて、マスコミで大きく報道された。ここでの遺跡整備は、発見時のものを保存処理して実物を見学できるようにした「遺跡の創造的活用」として注目された。

## 石舞台古墳の内部

わが国最大の方墳として知られ、墳丘の盛土がなくなって両袖式の横穴式石室が露呈したもの。本居宣長の「菅笠日記」（一七七二）にも、すでに石室の天井石が露出していたような記述がみられるという。



取材中に集めたパンフレットや資料に目を通していて気がついたのは、藤原京の規模はわたしどもが大学で学んだものより広がっていたことだ。かつて藤原京の範囲は、東西の境が中ツ道と下ツ道、南北が阿部山田道と横大路で区切られた範囲で、畝傍山・耳成山・天香久山の大三山でほぼ囲まれる範囲と考えられていた。

しかし近年の調査で、それまでの藤原京の外側から道路遺構が検出され、平成九年には藤原京は一辺五・三キロ四方で、条坊道路は両側に側溝をもち、道路幅員は一六、九、七の三段階に分けられ、寺院・官衙・宅地が配置されていたこと、面積的には従来の三倍もあり、のちの平城京や平安京よりも広く、最大の古代都市であることが判明した（試算では、藤原京の面積をひとすると、平城京〇・八、平安京〇・九になる）。しかも藤原宮は、藤原京のほぼ真ん中に位置していた。これに対し、藤原宮に相当する平城京や平安京の大内裏は、北側に位置している。藤原京時代には、法で国を治める律令国家としての歩みが始まり、現代に通じる政治基盤が築かれ、「和同開珎」が鑄造された。「日本」という国号をはじめで使用したのも、藤原京を発した遣唐使であつた。

しかし最大の古代都市も、ないしはそれ故にというべきか、わずか一七年で平城京に遷都され、役目を終えた。何故にか？

『古代人と巨大建造物の謎』（河出書房新社）





**甘樫丘からの大和三山の眺め**

写真中景は、左から畝傍山・耳成山・天香久山の  
大和三山。藤原京は、長らくの間、ほぼこれら三山  
の中におさまると考えられていたが、考古学と歴史学  
の成果は、三山を超えて広がっていたことを明らか  
にした。壮大な都市計画がなされていたのである。



**高松塚古墳**

周知のように、壁画の保存問題は、  
文化財保存の理念と技術、情報公開  
や管理体制など、さまざまな課題を  
浮き彫りにした。しかし今、多くの  
課題や反省を踏まえて、あらたな文  
化財保存の理念構築がなされている。



**小判形(左)・亀形(右)石造物と敷石遺構**

左側の樋は、写真では見えないが、傍にある湧水施  
設からの導水路で、小判形・亀形石造物とともに、  
導水路になっている。遺構全体は、閉鎖的な空間  
構成になっているので、祭祀の場と考えられている。

樞原市のホームページでは、衛生的な問題と  
地理的な問題をあげているが、両者の関係まで  
はふれていない。ホームページではさらに、最  
新の中国都城の情報と藤原京の実態があまりに  
もかけ離れていた現実などをあげ、さまざまな  
問題が絡み合った結果、遷都に至ったと推量し  
ている。

近年まで、平城京が最初の中国風の整った都  
城といわれていたが、今や中国の都をモデルに  
した日本最初の都市は藤原京であるというのが、  
歴史学の常識になっている。一月号の鎌倉の小  
論にも書いたことと同様なことが、ここでもい  
える。近年の考古学と歴史学の進歩は、古代都  
市の実相をより明らかにしている、と。

暫定遺産一覧表で飛鳥・藤原の資産群は、次  
のように位置づけられている。日本の古代国家  
の形成過程を明瞭に示し、中国大陸および朝鮮  
半島との緊密な交流の所産である一群の考古学  
的遺跡と歴史的風土から成り、両者が織りなす  
文化的景観としても極めて優秀である。

**参考文献**

- ・「飛鳥の考古学図録④ 飛鳥の宮殿」  
財団法人香村観光開発公社、平成十七年
- ・「飛鳥の考古学図録⑤ 整備された飛鳥の遺跡」  
財団法人香村観光開発公社、平成二十三年
- ・「国史高松塚古墳壁画」  
財団法人高松塚古墳壁画館、平成二十一年  
[http://www.city.kashihara.nara.jp/kankou/own\\_bunkazai/bun...](http://www.city.kashihara.nara.jp/kankou/own_bunkazai/bun...)

**飛鳥京苑池の発掘風景**

この遺構は、日本最古の本格的な庭園跡で、日本庭園の原形とも  
いわれ、都城史や庭園史上、一級の発見であった。朝鮮半島の古  
代国家・新羅(しらぎ)の庭園にも似ており、当時の国際情勢や  
飛鳥の都市計画を考える上でも貴重な資料になっている。



を書かれた武光誠氏は、その理由を次のように  
推理する。「南が高く北が低い藤原京の地形が  
嫌われたのではないかと考えている。町に住む  
人びとが内裏(天皇の住居)のある都の北端を  
見下ろす形は望ましくないのであろう」。わたし  
もこの説に賛成するが、嫌われた理由はちがう。  
都市の日常のことを考えれば、北斜面より南  
斜面の方が居住性はよい。また住民が斜面の上  
に住み、内裏が斜面の下に位置していたことは、  
雑排水が藤原宮域に溜まることを意味する。実  
際、藤原京では上水の確保やし尿処理、ごみ処  
理などが不十分だったため、疫病がはやり、大  
きな社会問題になった。